

1 南方熊楠略年譜

- 1867年 和歌山城下橋丁の金物屋南方弥兵衛の次男として生まれる。
- 8、9歳以降、『本草綱目』、『大和本草』、『和漢三才図会』などの本草書・博物学書を筆写。
- 1883年 和歌山中学を卒業する。上京して東京大学予備門に学ぶ。同級生に夏目漱石、正岡子規、山田美妙、秋山真之などがいた。
- 1885年 『動物進化論』(E.S.モース述・石川千代松訳)を購入する。
- 1886年 東京大学予備門を退学する。12月に横浜から渡米。
- 1887年 1月サンフランシスコに到着。8月ランシングで州立農学校に入学する。アナーバーで生活する。ヒューロン河畔で植物採集。
- 1891年 隠花植物の採集のためにフロリダ州を経て、キューバ島ハバナに着く。
- 1892年 ニューヨークを経て、ロンドンに着く。
- 1893年 英文論文「東京の星座」Constellations of the Far East を『ネイチャー』Nature に発表、以後しばしば論文掲載。大英博物館のウォラストン・フランクスに面会。
- 1898年 英国科学振興協会で「日本のタブーシステム」Taboo System of Japan と題する発表をおこなう。
- 1899年 『ノーツ・アンド・クエリーズ』Notes and Queries 誌に「さまよえるユダヤ人」The Wandering Jew などの論文を発表。以降頻繁に投書。
- 1900年 ロンドンを離れて帰国。帰国前に、大英博物館のジョージ・マレーから「日本は隠花植物(菌、藻等)の目録いまだ成らぬは遺憾なり」と言われ、隠花植物の研究を志す。帰国後、和歌山の実家および円珠院に寄寓。
- 1901年 10月に船で勝浦に向かう。
- 1902年 1月に那智の大阪屋に居を移す。3月、歯の治療のためにいったん和歌山に帰る。土宜法龍に宛てて生命、マンダラについて書簡で論じる【2004年新発見資料、資料①、14】。5月から12月にかけて、田辺、白浜、古座に滞在して那智に戻る。
- 1903年 那智で隠花植物採集に没頭する。土宜法龍宛書簡の中で、「南方マンダラ」と呼ばれる世界観を説明する。
- 1904年 那智で調査を終える。田辺での生活を始める。
- 1906年 鬮鶏神社社司田村宗造の娘、松枝と結婚。神社合祀令が出される。
- 1909年 このころ、神社合祀反対運動を開始する。『牟婁新報』にたびたび寄稿。
- 1910年 合祀推進派に面会しようとして、紀伊教育委員会の夏期講習に乱入、拘引される。
- 1911年 柳田国男との文通を開始する。紀伊半島の植生を記録して合祀反対を訴えた松村任三郎宛書簡を柳田が冊子にまとめ、「南方二書」と題して識者に配布する。
- 1913年 雑誌『太陽』に「十二支考」の連載を始める。
- 1918年 内務省が神社合祀政策の誤りを認める。
- 1921-22年 南方植物研究所の設立に奔走する。
- 1929年 田辺湾を訪れた昭和天皇にご進講をおこなう。
- 1936年 田辺湾の神島が天然記念物に指定される。
- 1941年 田辺にて没。

2 南方熊楠の「隠花植物」その他の生物研究（資料①②を参照）

ジョージ・マレーは1901年にスコットの南極探検に同行。その後、体調不良のため引退する。熊楠は独力で紀伊半島の隠花植物を研究し、協力者を開拓する。

- 地衣類 カルキンスの影響でフロリダ・キューバにて採集。1891年に *Guialecta cubana* を発見。
- 蘇苔類 和歌山時代の採集の中心。クマノウジゴケ *Buxbaumia minakatae* Okam. を発見。
- 菌類 那智時代の採集の中心。1903年に『ネイチャー』に送った論文で、当時の権威ジョージ・マッシーと論争。
- 藻類 那智時代の採集のもう一つの中心。1903年よりバーミンガム大学のジョージ・S・ウェストとの文通を開始する。1919年にウェストが43歳で死去したことにより研究計画が頓挫する。
- 粘菌類 フロリダからの手紙で初めて言及。1906年にリスター父娘との文通が始まることで、熊楠の植物研究の中心となる。1917年に自宅の柿の木から *Minakatella longifila* を発見。
- 羊歯類 那智時代に多く採集するが未整理。
- 顕花植物 アメリカ時代アナーバーで採集。那智時代にも多く採集しているが大部分が未整理。1910年に牧野富太郎に標本を送っている。
- 昆虫 那智時代に本格的な昆虫採集をおこなう。
- 小動物 紀伊半島海辺で採集したと思われる海産生物の標本が邸に残されている。

3 「南方マンダラ」の展開（那智時代の思想的飛躍）

1902年3月25日 土宜法龍宛書簡 粘菌のライフサイクル＝絵曼荼羅（資料③）

1903年7月18日 土宜法龍宛書簡 理と萃点のマンダラ（資料④）

4 南方熊楠と ecology

1859年 英国とチャールズ・ダーウィンが『種の起源』において進化論を体系化。

1866年 ドイツのエルンスト・ヘッケルが ecology (oecology 生態系、生態学) という概念を初めて用いる。

1911年 南方熊楠が書簡の中で「エコロジー」を生態学の意味で用いる（資料⑤～⑦）

5 神社合祀令

1906年に勅令として推進される。1914年までに全国で20万社あったうちの7万社が取り壊された。県によって実施に大きな差が見られる。1918年に廃止。（資料⑧～⑩）

6 タブーシステム論から神社合祀反対運動へ

1898年 Taboo System of Japan を発表。（資料⑪）

1910年8月～9月 柳田國男の『石神問答』を読み意気投合（資料⑫）

1911年8月29日 松村任三郎宛書簡いわゆる「南方二書」（資料⑬）

1912年2月9日 白井光太郎宛書簡（資料⑭）

環境保全に関して外国からの支援を得ようとしたが挫折（資料⑮～⑲）

参考文献

鶴見和子『南方熊楠、地球志向の比較学』（講談社学術文庫）、初版1978年

松居龍五・岩崎仁編『南方熊楠の森』、方丈堂出版、2005年